

共通教育再編WG回答案（教育学部）

卒業要件単位について

現行、教育学部の共通教育に係る要卒単位数は「30」であるので、教育学部はこれを堅持したい。

今後、具体的に要卒単位数の規則を策定するに当たっては、再編WGが掲げる教育理念を重んじつつも、各学部の事情を斟酌し、ある程度の柔軟な措置をお認めいただきたい。

教育科目区分の枠組

教育科目区分の大枠については特に異論はないが、細目については今後の議論が必要であるとする。今後の教員免状をめぐる議論もあり、教員免許状に必要な科目を「生きる力」に区分するよりも、きちんと細目区分建てした方がよいのではないかと考える。

外国語について

高知県の教育課題の一つである英語教育を踏まえると、共通教育も絡めて英語力を高めていく必要がある。

データサイエンス・情報教育について

再編していただく際に、以下の点についてご留意いただきたい。

①授業の内容について、現在初年度科目の「情報処理」として扱っているメールの送受信について等、情報機器の基礎的・基本的な操作に関する内容は全学生に指導すべき内容であり、共通教育の枠組みの中で扱う形にしていきたい。

データサイエンス部会の方で作成された資料「共通教育再編時の情報教育とデータサイエンス教育のあり方について」に記載されているように「情報とデータリテラシー」の中でその内容が扱えるのであれば問題ない。

②「情報とデータリテラシー」の中で現行の「情報処理」の内容が扱えることを前提として、

- ・「情報とデータリテラシー」を2単位
- ・「データサイエンス科目（名称は任意）」を2単位

どちらも必修科目として設置するご提案には、学部の共通教育科目を30単位にするという点から、学部の裁量に任せてほしいとの意見がある。

また、データサイエンス部会作成の資料「共通教育再編時の情報教育とデータサイエンス教育のあり方について」によると『応用基礎レベルのDS教育については、文部科学省の限定プログラム（応用基礎レベル）の認定に向け、各学部専門の応用基礎につながる科目として、2年生以上を対象に”DS基礎”を共通教育として新設し、必修ではないが全学の希望者が履修できる体制を整えることを提案する。』と記載されており、この点も異論はない。

しかし、『共通教育卒業要件単位数（モデル）』の方では選択必修となっている。これは学生の負担にも配慮して、自由に履修できる選択科目として提供する形が良いと考える。

加えて、当学部内では『応用基礎レベル』と『数学・統計学・論理学ほか』のために

授業担当者を確保することが困難であり、そのことを念頭に置かれた上で検討を進めていただきたい。

③その他：科目名や授業名について

データサイエンスとDSは同義であれば統一すると良いのではないかと。

以上

令和4年2月21日

共通教育再編 WG 座長

奥 田 一 雄 殿

理工学部長

津 江 保 彦

第6回共通教育再編 WG の内容に関する意見・質問等

理工学部各学科に照会し、理工学部からの回答として纏め、ご提示致します。

理工学部としましては、第6回共通教育再編 WG で提示された科目区分等に関して、現段階では検討できないとなりました。

細目科目区分が提示されましたが、登録制を想定した場合、各教員が何に登録してよいのかすぐにピンとくるような科目群に改変（たとえば、科目区分3における数学の内容、高学年次教養科目の内容、テーマ別複合領域の担当学部等をより具体的に）しない限り、学生の履修登録すらままならないものではなかろうかという疑念が提示されており、細目科目の内訳、卒業要件単位数の配当等に関して、現状提示された内容では検討できないというのが理工学部からの意見です。

以下に、出された質問等を列記しておきます。

【細目科目に関すること】

(1)「数理・データサイエンス・AI 科目」について

・「数学」という項目がありますが、「数学」といっても漠然としています。具体的にはどのような数学の内容（例えば線形代数学などのような具体的な内容）とどの程度のレベルを想定されているのでしょうか。その内容とレベルによっては、専門教育での授業科目の重複等を避けるため、学部のカリキュラム改革も含めて総合的に考える必要が生じますので詳しい情報提供をお願いいたします。

・応用基礎レベルである「DS 基礎」や「数学、統計学、論理学ほか」が「全学の選択必修」のなかに含まれていることを考えますと、「DS 基礎」や「数学、統計学、論理学ほか」の共通教育のカリキュラム編成上の位置づけ（「数理・データサイエンス・AI」科目の中「DS

基礎」や「数学、統計学、論理学など」がどのような意味・役割を持つのかなど）や、各学部の専門教育への関連付け等についての詳しい説明が必要のように感じます。専門教育への関連付け等の内容によっては、各学部の専門教育のカリキュラム改革も必要になると考えます。

(2) 「高学年次教養科目」について

- ・実際に高知大学で高学年次教養科目を立ち上げるとき、高学年次教養科目と高学年次教養科目以外の教養科目との差別化をどう図るのか（科目の内容が高学年次教養科目にふさわしいかについてどのようにして判定（認定）するのか、例えば現在ある教養科目でも授業担当者が「高学年次の学生向けにも通用する」と宣言すれば高学年次教養科目として認定されるのかなど）についてイメージがつかめませんのでお教えてください。それから高学年次教養科目をどの専門領域からどのくらいの数を設定するお考えなのかもお教えてください。
- ・現時点では高学年次教養科目が選択科目となっており、実際に高学年次学生がどの程度履修するのが問題となるのではないかと思いますので、履修を促すようなうまい仕掛けなどを考えることが必要であろうと思います。
- ・参考までに、現在、各学部の3年生以上の学生がどのくらい教養科目を受講しているかについての学年ごとのデータ（つまり〇〇学部3年生〇人4年生以上△人、××学部3年生〇人4年生以上△人という感じのもの）があるようでしたらお教えいただきたいです。

【単位数について】

- ・科目区分「数理・データサイエンス・AI 科目」の細目科目「リテラシーレベル」以外の「選択必修2単位以上」の記載事項は、選択・選択必修を含めて学部で決める事項であり、そもそもおかしいと考えます。
- ・卒業要件単位数について、38単位以上（理工学部は36単位数以上）となっております。そこで質問ですが、学部単位で共通教育の最低卒業要件単位数をこれより増やして設定することも可能なのでしょうか。（学部の専門教育での卒業要件単位数とも関連する話ですので念のためお聞きしています。）

令和4年2月8日

共通教育再編 WG 座長 奥田一雄 殿

農林海洋科学部長 枝重圭祐

新しい教育科目区分（案）について（回答）

第6回共通教育再編WGで提案のあった新しい教育科目区分（案）への意見照会について、下記の通り回答する。

1. 5つの教育科目区分：大枠について同意する。
2. 国際理解・コミュニケーション科目の名称：例示された科目のほとんどは外国語科目であると思われる。「国際理解」には相応の科目立てが必要であることから、名称は国際コミュニケーションの方が良いと考える。
3. EGAP：CLILの考え方や目的は理解できるが、専門分野以外（しかも学部を越えた分野）の内容を英語で理解したいというニーズが学生側にあるのか甚だ疑問である。一方、教員側としては、他学部の学生に背景や内容、学術用語の意味を英語で教授することとなり、多大な負担となるように思われる。また、学生の理解が進まず授業が進捗しないことが予想される。導入には慎重であるべきと考える。
4. 生きる力を育む科目と視野を広げ世界観を培う科目：区分名称の設定や、科目の仕分けには慎重な検討が必要である。例えば、メンタルヘルスやキャリアデザインなどは「生きる力を育む科目」に該当すると思われる。しかし、大学で学ぶ文学、芸術、哲学・宗教は、高校の国語や美術、社会とは異なる内容であり、専門分野に関連する科目であろう。とすれば、共通教育を受講する低学年の学生にとっては、初めて接する科目であり、視野を広げ世界観を培う科目にも該当すると考えられる。また、これらの科目を生きる力を育む科目に配置することで、人文・社会学系領域の科目数が不足することを懸念する。
5. 高学年次教養科目：参考資料は、科研費研究に関連したシンポジウムをベースにまとめたものであり、導入済みの3大学の事例を中心にポジティブに執筆されている。しかしながら、これら3大学は「世界トップクラスと伍して卓越した教育研究を推進」する大学であり、SRUを目指す本学とは方向性が異なる。また、2003年において3.8%であったものが2018において24.1%に留まっており、本資料からは大半の大学が導入していない理由が不明であることも留意すべきである。
6. 共通教育卒業要件単位数（モデル）：必修14単位には同意する。しかし、選択必修については細目科目区分を含めて慎重な検討が必要である。

今回の共通教育再編の背景は、人文社会科学部への負担の軽減であったと理解している。現行科目の削減の可能性や新科目設置の必要性、それらによる教育負担の増減の可能性についてのお考えがあればお聞かせ願いたい。

第 6 回共通教育再編 WG で提案された案に関する学部意見

地域協働学部

1. 「5 つの教育科目区分」という枠組みについて

第 6 回共通教育再編 WG での座長提案のポイントは「5 つの教育科目区分」という枠組みについて確認を求めたことだと理解される（それぞれの「教育科目区分」の内容については今後議論するとして）。WG では、一応この枠組みが承認された形になったが、詳細に検討するといくつかの疑問や不安がある。

(1) 「国際理解・コミュニケーション科目」について

「国際理解・コミュニケーション科目」を科目区分の 1 つとして立ち上げた最大の根拠は、本学の次期中期目標・計画で国際感覚を持った人材の養成が謳われていることである。

しかし、現在の提案の「国際理解・コミュニケーション科目」は実質的には語学技能の修得をめざすものとなっている。語学技能の修得は大切なことだが、それだけでは国際感覚を有する人材の養成を達成できない。5 つの教育科目区分の 1 つとして「国際理解・コミュニケーション科目」を立ち上げるのであれば、「国際理解」を深めるためのものとしての内容を含む必要があると考えられる。

(2) 「情報・データサイエンス・AI 科目」について

「情報・データサイエンス・AI 科目」を科目区分の 1 つとして立ち上げた最大の根拠は、本学の次期中期目標・計画で数理・DS・AI 教育の推進が謳われていることである。

ただ、これを共通教育でどの程度実施するか（共通教育での実施と専門教育での実施の役割分担）、共通教育で実施するものの内容、そしてそれらをふまえて教育科目区分の 1 つとして独立させるかどうかについては更に検討を行う必要があるように思われる。

実際、第 6 回共通教育再編 WG での、データサイエンス部会報告では、今後の情報教育・DS 教育について、リテラシーレベルの「情報とデータリテラシー(仮称)」「データサイエンス入門 (仮称)」の 2 科目 4 単位の必修化と、応用基礎レベルの「DS 基礎」の 1 科目 2 単位の希望者履修体制の整備が提言されているが、この必修 4 単位+選択 2 単位の実施だけでさえ、授業担当者確保などで非常に困難が多いことが指摘されている。共通教育再編 WG で提案されている「情報・データサイエンス・AI 科目」を 5 つの教育科目区分の 1 つとして立ち上げるという考え方（数理・DS・AI 教育を共通教育で意欲的に推進・拡充していこうという議論）と、データサイエンス部会の考え方（現在学内で数理・DS・AI 教育を担っている方々の現状をふまえた議論）との間に、かなり大きなギャップがあるのではないかと危惧される。

(3) 現在の「初年次科目」の考え方について

現在の共通教育の特徴の一つは、新入生全員に対して「学びの転換」「基礎的スキルの修得」「学問への動機付け」「キャリア形成支援」に関する科目をパッケージとして提供していることである。今回の「5つの教育科目区分」の提案では、これまでの「初年次科目」がどのように評価され、どのように変更しようとしているのか不明瞭だと思われる。これまでの「初年次科目」の成果を高く評価して、「初年次科目」の枠組みは無くしたが、「初年次科目」の後継的科目（具体的には「大学での学び方科目（導入科目）」、「国際理解・コミュニケーション科目」の「大学英語入門」「英会話」、「数理・データサイエンス・AI 科目」の「情報とデータリテラシー(仮称)」「データサイエンス入門（仮称）」を初年次履修科目とするのか、あるいは初年次履修科目とはしないのか。更に言えば、これまでの「初年次科目」は全学部学生必修であったが、後継的科目でも全学部学生必修とするのか、あるいは全学部学生必修とはしないのか（初年次部会の最終報告では「課題探求実践セミナー」は全学部学生必修とはしないとされているが）。

2. 「豊かな知性と人間性を育む教養科目」について

教養科目を「5つの教育科目区分」の枠組みの一つの柱とすることについては特に異論はなく、またその具体的内容については今後の検討に委ねるということであったので、ここで特に意見を述べる必要はないが、第6回WGの説明で疑問が残った点について簡単に記しておく。

第1に、「生きる力を育む科目」と「視野を広げ世界観を培う科目」の区別について理解が難しいように思われる。例えば、今回の提案で、「生きる力を育む科目」に「文学」が示されていて、「視野を広げ世界観を培う科目」に「人文分野科目」が示されている。「文学」は「人文分野科目」には含まれないのか。別の例をあげると「経済学」は「生きる力を育む科目」と「視野を広げ世界観を培う科目」のどちらの区分に含まれるのか（どちらにも含まれ得ると思われるが）。

第2に、「高学年次教養科目」については、過去の経緯および総合的教養教育の理念などをふまえ、今後しっかりとした議論をして頂きたいと要望する。

3. WGにおける議論の進め方について

これまで6回のWGが開催されたが、議論の進め方について、そしてその議論に基づく共通教育再編案について、疑問があるので記しておく。

毎回のWGは、開催時間の大半が座長からの提案とその説明に費やされており、その後若干の質疑応答がなされて終わっている。WGメンバー間の議論はほとんど無い。現在の再編案は、WGの後に文書で提出された学部からの意見をある程度は反映させている面もあるが、実質的には座長がほぼ一人で創り上げたものと言っても良い。座長の意欲・努力・能

力には大いに敬意を払うが、WG メンバーさらには全学の知恵と経験をもつ方々が意見を寄せる場や議論をする場をしっかりと設定することにより、より良い再編案を作成することができるのではないかとと思われる。

また、議論の内容について、以前に提出した学部意見でも述べたが、再編案検討の議論が現在の共通教育の評価に基づいてなされていないので、議論が地に足のついたものとなっていない感がある。「共通教育はこうあるべきだ」「こうあることが望ましい」という考え方が先行しているように思われる。現在の共通教育の成果と課題に関する評価に基づく議論も必要であると考ええる。

共通教育再編 WG 座長提案に対するデータサイエンス部会意見

データサイエンス部会

1. 数理・データサイエンス・AI 科目の内容について

データサイエンス部会により提案したリテラシーレベル必修化の科目構成は「情報とデータリテラシー」および、「データサイエンス入門」の2科目4単位であり、これにより文部科学省の認定制度もクリアする内容としております。例えば、数学に不慣れな人文系学生に対しても、現実の社会問題を如何に数理・データサイエンス・AI の活用が有用であるかを実例をもって学んでいくことにより、十分に数理・データサイエンス・AI の初級レベルの学力をつけさせることができる構成としております。

座長提案において数学に不慣れな人文系学生のために新たに「数学」「統計学」などを受講させるということになりますと、いたずらに人文系学生に負担を強いることとなり、数理・データサイエンス・AI の有用性を理解する前に挫折感を与えることになりかねません。また、文科省への認定プログラム構成を根本から見直さざるを得なくなり、部会より提案した2科目構成ですら担当教員の負担が懸念される中、教員側にも大きな負担を強いることになります。

以上のことから、「数学」「統計学」などの科目をリテラシーレベル前段階の科目として選択必修科目とすることには強く反対いたします。

2. 数理・データサイエンス・AI 科目の卒業要件単位数について

データサイエンス部会においては、2021年9月時点での文部科学省の応用基礎レベル認定制度の動向に配慮して、共通教育内に選択科目として応用基礎レベル科目を全学の学生が取得できるように、あくまでも選択可能な科目として、必修化しない方向で提案いたしました。2022年2月9日に開催された応用基礎レベル認定制度の文科省説明は添付資料にございます通り、全学単位ではなく、学部単位での申請が認められることが明示され、共通教育に科目を設定する必然性は無くなりました。

座長提案においては数理・データサイエンス・AI 科目の卒業要件単位数は選択必修を含めて6単位とされていますが、これは文科省の認定制度には全く対応しておりません。リテラシーレベルは必修化する2科目4単位で必要十分である一方、応用基礎レベルのプログラム構築については、関連スタッフが圧倒的に不足している本学にとっては部局単位の実施認定を検討していくことが現実的な選択肢です。共通教育にも応用基礎レベル科目を置くことは有意義ではありますが、選択必修とする場合は応用基礎レベルの認定を受ける部局単位で指定されるべきであると思われます。原案のように全学的に卒業要件とされる選択必修科目になると、現状のスタッフで開講可能な科目すらわずかにしか設定できない状況においては大人数講義とせざるを得なくなるなど、教員に著しい負担を強いることになります。また、応用基礎レベルの認定を受けない学部の学生にとっても選択必修として履修しなければならないのは、大きな負担となります。従って、数理・データサイエンス・AI 科目は4単位必修のみとするとともに、卒業要件については科目区分毎に細分化せず融通をもった運用ができる設定としていただきたいと思います。

第7回共通教育再編 WG (R4 2, 28) 進め方 (座長メモ)

本日は、主として「共通教育再編 WG における検討の報告書」について議論をお願いしたいと考えています。

最初に、前回第6回 WG の議事要録案の確認をいたします。3ページをご覧ください。皆さまへメールでお知らせしておりますが、現在までのところ、ご意見等は特にございませんでした。如何でしょうか？ では、この形で確定いたします。ありがとうございました。

それでは議事に入ります。

本日はまず前回 WG の後に提出いただいた学部等からの意見について、座長から現時点で可能な範囲で回答をいたします。13 ページの資料1をご覧ください。

教育学部からの1つ目、共通教育の卒業要件単位の配当はそれぞれの学部の事情を配慮して決めるのは妥当であると考えます。ただし、共通教育の教育目的を十分に果たせる範囲で適切な単位数を決めていただければと思います。なお関連して、理工学部から共通教育の要卒単位を増やすことは可能かというご質問をいただいておりますが、学部で適正な単位数をお決めいただければと思います。

教育科目区分における細目科目の立て方や内容について、今後の議論が必要であると言うことはその通りです。

外国語教育の充実・向上についてのご指摘、ありがとうございます。今後、是非そのような方向で議論を進めていただきたいと考えています。

データサイエンスと情報教育に関する1つ目のご指摘は、2科目を必修とすることが学部裁量にすることですが、これについては、データサイエンス部会の報告にもあるように、リテラシーレベルのプログラム認定を取るかどうかに関係しますので、データサイエンス教育推進 WG と教育情報委員会での DS 科目のカリキュラムの検討のなかで詰めていただければと考えます。

DS の応用基礎に関する2つ目のご指摘は理工学部と地域協働学部、データサイエンス部会からもご意見をいただいております。応用基礎にあたる科目としての

「DS 基礎」は学部による開講を基本として、選択必修から単に選択科目に位置づけ、その受講は全学に開放するというかたちに修正しています。

あと、数理・データサイエンス・AI 教育科目に「数学や統計学」が配置されている問題については、理工学部とデータサイエンス部会から出されているご意見とも関連しています。数理・データサイエンス・AI 教育科目に、認定プログラムの授業2科目だけではなく、数学、統計学、論理学等を並置している理由は、共通教育の新しいカリキュラムにおけるこの教育科目の趣旨・目的をもう少し広く、広義に設定しようという考え方からです。データサイエンスの素養が求められている中で、データサイエンスそのものだけではなく、その基礎となる数学的なものの考え方や、社会調査や疫学調査、また、農業や商品開発などで駆使されている統計学の応用例と重要性を学んでほしいという考えがあるからです。それから、データサイエンスを教育に取り入れるときにしばしば強調されているのが、学生の日本語能力の低下です。そもそも入試などで出題される問題文の意味すら理解できない学生が多いと指摘されている中で、今本当にデータサイエンスを学ばせるだけで良いのかという議論です。日本語の文法は言うに及ばず、三段論法、集合論などを含む汎用的で平易な論理学の内容を教える必要を感じています。もちろん、専門教育および学問としての数学、統計学、論理学は厳然と存在することは認識しています。ここで言う数学、統計学、論理学は教養教育におけるリテラシーを身に付けるための内容レベルと手段に位置づけるという座長の考え方と感覚です。数理・データサイエンス・AI 教育科目の目的と科目構成については今後議論を重ねて明確化し、充実させることを望んでいます。

農林海洋科学部からのご意見に従って、国際理解・コミュニケーション科目名を国際コミュニケーション科目に修正しています。これは地域協働学部からの国際理解に関する内容を含む授業が現状では用意されていないというご指摘にも関連します。

それから、EGAP の実施は慎重であるべきというご意見が寄せられていますが、新規授業科目であり、現状ではそのとおりだと思います。EGAP を開講する目的は学生が専門分野を越えて英語を駆使する環境に慣れさせるという面がありますが、他方、留学生の獲得と彼らへの英語による授業提供を通じ、本学と学生交流協定を締結している外国の大学へ本学の学生を留学させる機会を増やすという面もあります。EGAP の企画、授業内容や授業の進め方については、外国語教育に関する調査・検討 WG や国際連携センター、OASIS などと密に連携して

実現に向けて検討されることを望みます。

生きる力を育む科目と視野を広げ世界観を培う科目に関するご意見は、農林海洋科学部と地域協働学部からいただきました。文学や芸術、哲学・宗教は大学教育のレベルでは、いくら共通教育とは言え、専門分野に属する学問として位置づけられるというご指摘と受けとめました。文学と哲学・宗教は生きる力を育む科目の欄から省いています。しかし、私の個人的な信念から、美術、音楽、工芸、デザイン、書道などを含む「芸術」はここに配置したままにします。もちろん、芸術分野を実際に担当される教員が、自分の授業は生きる力を育む科目としてではなく人文分野で開講する内容であると主張される場合もあると推察します。いずれにしても、教養教育科目の細目科目の内訳については、今後の検討課題と考えます。

地域協働学部から、現行の初年次科目の目的と成果についての検証と評価が充分になされていないというご意見をいただきました。初年次部会での検討結果が報告されましたが、ご指摘の点については部会では詰めた議論はあまり行われていなかったように認識しています。検証と評価については、このあとでご提案する本 WG の報告書の中にも記載しておりますが、来年度からすぐに検討すべき課題だと考えています。また、農林海洋科学部から、共通教育の授業担当に関する負担の増減の可能性についてのご質問がありましたが、これも報告書に記載しておりますとおり、共通教育の授業担当体制についての今後の検討に委ねることになります。

理工学部と農林海洋科学部から、高学年次教養科目に関するご意見をいただいております。

理工学部からは、2 回生以上のどれくらいの学生が現行の教養科目を受講しているかの調査依頼がありましたので、21 ページの資料 2 にその調査結果を示しました。一般的には、授業を取りこぼして再履修した学生と、学部のカリキュラムと時間割との関係で 1、2 年生の間に取り切れなかった学生が混在しています。それ以外は、教養科目の授業に興味があって受講している学生が一定数いると推察され、これらの学生を合計すると結果的に教養科目では高年次学生が比較的に多く履修しているという結果となっています。22 ページを見ると、教養科目全体の学年別受講生総数としては、1 年生は 1 万 1400 名、2 年生は 3300 名、3 年生は 2200 名、4 年生は 1300 名となっております。このように、上回生の受講生が多いことは、ある意味、共通教育の受講様態としては健全かも知

れないと考えられます。参考までに、初年次科目については、当然ながら 2 年生以上の履修者は極端に少なくなります。今年度の 1 学期を例にすると、1 年生延べ約 1 万人余りの総受講者数に対し、2 年生は約 700 人（この中には農林海洋学部における 2 年次履修である課題探求実践セミナーの受講者含んでいます）。初年次科目を履修している 3 年生は約 120 人、4 年生は約 40 人程度となっています。

高学年次教養科目の目的・意義と授業内容、具体的な実施方法などについては、今後この科目について調査・企画するコーディネーターの組織が必要と考えています。ちなみに愛媛大学では、高学年次教養科目は最初に工学部から取り入れられたと聞き及んでいますので、その実施状況調査は可能と考えます。

以上で、学部から寄せられたご意見に対する座長からの回答とさせていただきます。ありがとうございました。これについてご質問はありませんか。

――

それでは、来月の全学教育機構会議に提出する、「共通教育再編 WG における検討状況に関する報告」についての協議に入っていきます。

23 ページの資料 3 をご覧下さい。本報告では、今後この WG を引き継いで共通教育の改革の検討を進めていくため、本 WG で取り上げてきた課題や問題をできるだけ漏らさず具体的に盛り込むことに主眼を置いています。

まずは本文を読ませていただきます。

・・・・・・以上です。

はじめに申し上げました通り、本報告書は今後の検討のための引き継ぎという性格をもった位置づけにしておりますので、確定的な事項以外にもなるべく多くの情報を盛り込みました。それゆえ、座長の主観的な見方が反映されている表現が多々あるということをお断りしておきます。ここでは、あきらかにかかしい、正しくない箇所がある、または、適切性に欠けるという事項または内容に絞ってご意見をお伺いしたいともいます。

如何でしょうか？

・・・・・・

この報告案の内容について委員から追加のご意見がありましたら、3月14日(月曜日)までにお知らせ下さい。寄せられましたご意見の妥当性と適切性を考慮させてもらった上で修正や削除、補足・追加等をいたしたいと考えています。

その他、報告書の細かい文言やいいましなどの修正は、座長の責任で行わせていただき、それを最終報告として3月24日の全学教育機構会議へ提出させていければ幸いに存じます。